

— 1 —
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

主人公である「涼太(りょうた)」が十三歳(さい)になった誕生日、離(はな)れてくらす父親からロードバイク(競技用自転車)が送られてきました。そして、笠城山(かさぎやま)に登る「ヒルクライム」という自転車の大会に無理やり参加させられます。同じ学校の「俊介(しゅんすけ)」も参加するなか、スタートの合図を待っています。

最終グループ全員が、スタートラインに着く。おれと父さんは前から三列目。後ろにもまだまだたくさんの選手がいるから、まあまあ場所だろう。

白いハットにプレザー①スガタのスターターが位置についた。時計を見ながら、ピストルを上空に向ける。

がやがやとにぎやかだった周囲がシンとなる。パンという乾(かわ)いた音が、白い煙(けむり)と一緒に青空にとけた。

一斉(いっせい)にスタートする集団。ゆっくりとペダルを回す音、カチリとギアを変える音、タイヤが舗装(ほそう)をとらえる音が重なる。

こんなに多くの選手たちのなかで走るのは初めてで、前や横の自

転車にぶつからないようにするので精一杯(せいいつぱい)だ。それでも流れに乗っていける。

大きく右折して、笠城山にむかう県道に入った。

沿道にはたくさんの人。車いすのおじいちゃんから、小さな子どもまで、みんな手を振(ふ)ってくれている。『がんばれ』という声援(せいえん)に、自然と笑(え)みがこぼれた。

しばらくは②ジュンチョウだった。風を切って走るのが気持ちいい。

「よお。まだ、落車してないで残っているんじゃない」

後ろから聞きおぼえのある嫌味(いやみ)な声が聞こえた。

「1」と、隣(となり)に割りこんできたのは俊介だった。

「なんだよ。そっちこそ、大会二位だっていう割には、ゆっくり走っているじゃんか」

俊介のすがたを見て、このペースで走れば上位に食いこめるのかという期待が膨(ふく)らんだ。何千人もいたって、中学生なんてそんなに何人もいないのかもしれない。

「おまえ、本当になにも知らないんだな」

俊介が(1)片方の口の端(はし)だけ上げて笑った。

「そんなんで、完走できるほど甘(あま)いレースじゃないだよ」

「1 A 1」

「おれが断言するよ。おまえには完走は絶対無理だ。邪魔(じやま)だから今のうちにリタイアしたほうがいいぜ」

俊介がそう言って前方をにらんだ。

「な、なんだよ。その言い方……」

言い返そうと思った瞬間(しゅんかん)、異変を感じた。

【 2 】としていた選手たちの話声が急に止んだような気がする。あちこちで聞こえるギアを切り替(か)える音。何百ものペダルを回す音が大きく聞こえる。

前を見ると最初の信号が見えた。今日はレースで封鎖(ふうさ)されているから、集団は赤信号を突(つ)つきつていく。

沿道の声援がひととき高くなる。

隣を走る俊介が腰(こし)を浮(う)かせた。まさに赤信号の下をくぐろうとしたとき、急にスピードを上げた。風になったみたい

に。

「(2)な……」

父さんが言っていた『スタートしてすぐは追い越(こ)し禁止のパレード走行』『その先の信号から五十メートル先のきろく計測開始地点が本当のスタート地点』という意味がやっとわかった。

今まではウォーミングアップにしかない。ここが本当のスタート地点……。

どんこいで、おじさんを抜(ぬ)いて前に出る。その前のピンクのジャージの女の人も抜(ぬ)かした。

しばらくすると、まっすぐ続く道路の先に赤い鳥居が見えた。

少しずつ大きくなる鳥居。確実に進んでいることが実感できる。

近づく、道路をまたいだ巨大(きょだい)な鳥居だった。赤い口を開けて、色とりどりの選手を飲みこんでいるように見える。

鳥居を通り過ぎてしまうと、急に足が重くなってきた。ぼたりぼたりと、汗(あせ)が頬(ほ)を伝(つ)う。

延々と続く坂道。人家のならぶ代わり映(ば)えのしない風景。ゴールは一体どこなのか、山は遠くかすんで見えるだけだ。

目標とするものがなくなって、気力がなえてしまったせいか、思うように進まない苛(い)ら立ちだけが募(つの)る。

絶対完走してやると誓(ちか)ったのに。父さんにどうしても言うことをきかせてやりたいのに。

(4)風はないのに、まるでむかい風のなかを走っているみたいだ。

『そんなんで、完走できるほど甘いレースじゃないんだよ』

俊介の言葉が脳裏(のうり)をかすめる。

「 B 」

汗が目に入って、④ランボウにグローブでぬぐった。

むかい風のなか、心細く走った道のりを思い出す。あれは、初め

加速した集団は大蛇(だいじゃ)のように長くなり、山をめざしてかけ上っていく。おれはどう見ても尻尾(しっぽ)に近かった。まわりを見ると、年配の人や女の人のすがたが目立つ。父さんはいつのまにかいなかった。すっかり置いていかれたらしい。

なんだよ。③ホゴシヤ同伴(どうはん)だからはぐれるなんて言っていたくせに。

なだらかな坂道を走りながら、うらめしく前の選手の背中をにらむ。

『おまえには完走は絶対無理だ』

人をなめきった俊介の言い方。

首を振って(3)唇(くちびる)をかんだ。おれには、なんとしても登らなきゃならない理由があるんだよ。父さんに約束させたんだから。

目の前の赤いジャージ。俊介とは似ても似つかないおじさんだ。

でも、この人には遅(おく)れないでついていこう。そう決意してペダルを踏(ふ)む足に力をこめた。

赤いジャージのおじさんには、なんとかついていけた。もう少し速いペースでもだいじょうぶかもしれない。

左側に学校らしい建物が見えた。沿道の小学生が旗を振って応援してくれている。

少しだけ傾斜(けいしゃ)が楽になった気がして、ペダルをどん

でサイクリングロードを通って海までいった帰りだった。

何回か近場をロードバイクで走ってみて、慣れてくると案外乗り心地(ごこち)のいい自転車だということを知った。今まで乗っていたマウンテンバイクとは、持ち上げたときの軽さが違った。そのせいか、アスファルトの上ならかなりスピードも出るし、遠くまでいける。

家の側を走っているサイクリングロードが海まで続いていることを知り、どこまで遠くまでいけるか試してみようと実行した。朝家を出発して、お昼で引き返せばいいと思ったのだ。行きはじゅんちようそのもので、午前中のうちにめざしていた⑤リンカイ公園までいった。

父さんがくれた*トゥークリップをペダルにつけると、靴(くつ)とペダルが一体化された感覚になる。ペダルを踏みこむ力だけでなく、引き上げる力も前進する力に加わる。

ロードバイクは、羽(う)が⑥ハえたみたいに軽々とおれを海まで運んでくれた。

けれど、弁当を食べて引き返したその道すがら、風景はすっかりそのすがたを変えた。

今までは、追い風だったのだ。帰り道は完全なむかい風だった。それに疲(つか)れもあったのだろう。

いくらこいでもちっとも進んでいるようには思われなかった。太

もがパンパンにはって、尻のサドルに当たる部分がジンジン痛んだ。汗で湿(しめ)ったTシャツが肌(はだ)にまとわりついて気持ちが悪かった。前から吹(ふ)きつける風に、体力を奪(うば)われていくのを感じながら、それでも懸命(けんめい)にこいだ。行きの倍以上の時間がかかって、日が沈(しず)みかけたころ、ようやく家にたどりついた。

今もその帰り道と同じだ。こいでも進んでいる実感がわかない。気温が上昇(じょうしょう)したのか、大きな汗が頬を伝う。少し前を走っている緑色のジャージのおじさんが、ボトルの液体をゴクゴクと喉(のど)を鳴らして飲んだ。急に喉の渴(かわ)きに気がついて、ボトルホルダーからドリンクを取り出した。

『前半飲みすぎると、あとで後悔(こうかい)するぞ。ペース配分を考えて、給水所もあるからうまく利用するといい』

父さんが、レース前に言ったアドバイスを思い出し、口に含(ふく)むだけで我慢(がまん)する。

緑ジャージをなんとか抜かした。抜かそうと横にならなるとき、ハアハアという荒(あら)い息が聞こえた。

苦しいのはおれだけじゃないんだな、と思った。

「3」¹とした一方で、どうしてこんなにもたくさんの方がレースに出るのかふしぎだった。

選手とは思えなかった。カゴがついていないだけのふつうのママチャリ、白い通学用ヘルメット、学生服を着た人がすごいスピードで追い抜いていった。

その黒い学生服の背中には、大会用のゼッケンがしっかりとついている。スタート地点で、ボランティアかなにかと思えなかった高校生は、選手だったのか。

沿道から大きな拍手(はくしゅ)がわく。父さんが『けっこう有名な人』と言った理由がなんとなくわかった。

「D」¹ そうならそうと、最初から教えてくれればいいのにさ。父さんのもったいぶった言い方に再び腹が立った。

なんとしても完走して、父さんに言うことを聞かせてやる。おれは、痛みだした太ももに、むちを入れた。

左前方に人垣(ひとがき)が見えた。今日初めての給水所だ。給水所に目もくれず走り去る人もいれば、止まって道路脇(わき)のスペースで水を飲む人もいるらしい。

あそこでひとまず休憩(きゅうけい)しよう。そこまではがんばろうと、力を振り絞(しぼ)った。

加部鈴子の文章による

*トゥークリップ 自転車のペダルにつけて、足を固定するもの。

*ツール・ド・フランス 自転車のプロロードレース。

例えばさつき抜かしたおじさんが、いくら練習を積んでも、一流の選手になるなんて考えられない。父さんが前にテレビで見ていた*ツール・ド・フランスに出られる可能性はゼロに近い。父さんだつて、まさか医者(いしゃ)を辞(や)めてプロの自転車乗りになるうとは思っていないだろう。

それなのにどうして、ハードで過酷(かこく)なレースに出ようなんて思うのだろうか……。

『笠城山ヒルクライム、スタート地点から五キロメートル』
左手にある小さな⑦カンパンが目に入り、現実にもどされた。スタートして五キロ。ゴールまで二十キロだから、まだ十五キロもあるのか。でも、同時にもう四分の一は終わったということになる。

風景はいつのまにか、緑のきれいな⑧ボクジョウのような場所へ変わっていた。

「見て！ あの人、選手なの？」

突然、沿道の子どもが指をさした。

「C」¹ おれのことをさしているのかとドキッとした。すると、すぐ後ろから風を感じた。

「(5) なっ……！」

追い抜いていく自転車を見て、「4」¹とした。

問一 ぼう線①から⑧のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 この文章を「涼太が」する物語。または、「涼太が」なる物語。という一文でまとめなさい。ただし、「」に入る言葉は「する」「なる」をふくめて、三十字以上四十字以内とします。

問三 波線(1)は「俊介」のどのような気持ちを表していますか。最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

A 大事なレースで走っている最中なのでドキドキしている。

I 初めてロードレースに参加する「涼太」をばかにしている。

ウ 初心者である「涼太」に嫌味を言い返されおもしろくない。

E がんばっている「涼太」をほほえましく思っている。

問四 波線(2)と(5)のとき、「涼太」の気持ちはどのようにちがつていますか。ちがいがわかるように、五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問五 波線(3)は「涼太」のどのような気持ちを表していますか。最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

A さびしさ

I たのしさ

ウ くやしき

E うれしさ

問六 波線(4)のように感じた理由を説明しなさい。

問七 「1」から「4」に入る言葉として、

最も適当なものをそれぞれ次から選び、その記号を書きなさい。
なお、記号はそれぞれ一度ずつしか使えません。

ア ギョッ

イ ほっ

ウ ざわざわ

エ すうつ

問八 〔 A 〕から〔 D 〕に入る言葉の組み合わせ

わせとして、最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア A え? B ちえっ C くそっ! D ……?

イ A くそっ! B ちえっ C ……? D え?

ウ A ……? B くそっ! C ちえっ D え?

エ A え? B くそっ! C ……? D ちえっ

問九 「涼太」自身はなぜレースに参加しているのでしょうか。その理由として最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア 買ってもらったロードバイクで海まで行き、その楽しさに目覚めたから。

イ 同じ学校の「俊介」に散々ばかにされたので、見返したいと思っているから。

ウ 完走したら、父親に言うことを聞いてもらうという約束

をさせたから。

エ 父親が勝手に申しこんだから参加しただけであって、自身に理由はない。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

Kさん、前便の終わりのほうで私は、親と学校の先生以外の大人を知らずに大きくなっていく人々の多いことに驚(おどろ)いていと記しました。記しましたが、その実態をしようとしたわけではありません。高校九年、短大三四年の計四三年間、若い人たちと日々接してきた実感でしかありません。「おまえなんかの知らないところで、自分たちはいろんな大人に会ってるわい」と反論があるかもしれません。実際そのとおりかもしれません。インターネットの世界でも、若者たちは私が若かった頃(ころ)よりはるかに多くの大人の言動に接しているでしょう。

でも、(一)私が案じているのは、心から尊敬できる人間にどれくらい会えているか、心をふるわせられる人との出会いをどれくらい体験しているかということです。それというのも、尊敬する人は? と尋(たず)ねたとき、私のこれまでの経験では、返ってくる答えのほとんどが親だからで、親を除いてというと、わずかにあるのが部活動の顧問(こもん)の先生。その二つを除くと全くと言っていいほど出てこないからです。入学の面接試験のときなどにも、私はよく尋ねました。これまで読んできた本の中で出会った人物でもいいから、親以外に誰(だれ)かいないか、映画のキャラクターでもいい、と。それでも若い人たちの口から、尊敬できる人物、

心惹(ひ)かれる人物の名が出てくることはまずありませんでした。

三、四年前のある夜のこと、TV番組でどうやって社員を採用するかについて、さまざまな人が語っていたことがあります。番組のタイトルも局も①キロクしておかなかったのですが、その中である企業(きぎょう)の経営者の方が、尊敬する人は? と尋ねて、親を出してくる若者は採用しないと決めていると答えておられ、私はひとりTVの前で拍手(はくしゅ)してしまったものでした。

もちろん親を尊敬することが悪いと言っているわけではありません。若い人たちの言っていることが必ずしも、嘘(うそ)だとも思いません。いえ、大半は、本当に親御(おやご)さんを尊敬しているから、そう答えたのでしょう。中には、考えることが面倒(めんどう)で、あたりさわりのないことを言っておけばいいと思って親をあげた人もいるでしょうが……。

でも、と私は問いたくなるのです。それがあなたにとって世界のすべてなのかと。

なぜ親御さんを尊敬するのかと問えば、私の出会ったほとんどの若者は、自分を育ててくれたからと答え、仕事(いそが)しいのに、自分の面倒をよく見てくれたからと答える。私はそんな答えをききながら、それは「 A 』であって、

「 B 』とは違(ちが)うだろう、と思っていました。しかもまだ、感謝するのは早いだろうとも。

他人(ひと)に感謝して何が悪い、と叱(しか)られそうですが、本当に感謝と言える感情が私たちの中に生じてくるのはまだずっと先、何十年も先。多くは感謝すべき相手を失ってから、と思い知ってしまった私には、たとえばTVのコマーシャルで幼稚(ようち)園児が声を②ハリ上げて歌う、お母さん、ありがとうといった内容の歌も、大人に言われて歌っているだけの浅薄(せんぱく)のこの上ないものに感じられるのです。

もし私に青年期を生きた子どもがいて、その子どもが親である私に感謝していると知ったら、ましてやこちらを尊敬しているなど知ったら、(2)私はそれこそすつこけてしまうでしょう。

親なる者の愚(おろ)かさゆえ、そうしたことばに出会ったその瞬間(しゅんかん)はぼつと嬉(うれ)しくなるかもしれません。でも次の瞬間、おそらくは情けなくなる。そういう親でありたいと思います。生きて生きて生きて、人間になろうと懸命(けんめい)になっています。ときに、親に感謝しているひまなどない。まして尊敬するなんて。そんなに小さくまとまると、私だったら言うだろうと思います。こんな親をこえる存在は世界のあちこちにいてくれる。今すぐこの親許(おやもと)を飛び出して——物理的にであれ、精神的にであれ、——そういう人たちに会ってこい。

私は、(3)子ども時代、本の中でたくさんの人に会いました。その頃子どもが日常会える生(なま)の人間は、親きょうだいと近

業は、七〇代に入った今も続いています。

なぜ本を読むの？ なぜ旅にでるの？ なぜ見知らぬ人と会って話をしようとするの？ 私は若い人たちからときどきかれます。

一〇〇パーセントこれだという答えにはまだ行き着かないのですが、でもどんな本に感動するかと問われれば、自分を壊(こわ)してくれる本、とまでは私はこれまで答えてきました。つい最近になって、自分が求めていることはこれだったのだと気付かせてくれる文章に出会いました。それは川上弘美(かわかみひろみ)の短編集『なめらかで熱くて甘(あま)苦しくて』(新潮社)の書評の中で、このことで評論家の三浦雅士(みうらまさし)がこう書いていたのです。

「人は言葉によって自分自身になる。感動とはその自分自身が分解し失われる瞬間のことであり、感動によって生き返ったように感じるのは、その後に自分自身が新たに組織し直されるからである」(『毎日新聞』二〇一三年四月二十八日「今週の本棚(ほんだな)」)

思わず深く頷(うなず)きました。自分を壊してくれるもの。自分を限りなく小さく感じさせてくれるもの。そういうものに出会うことの喜びを手にしてほしい、と私も自分の体験から学生たちに願(ねが)い、口に出して言い続けてきました。学生たちからはしばしば疑問の声がきました。そんなことになったら、生きてゆけない、と言うのです。自分が小さいと感じることが喜びにつながるなんて、まして自分が壊されて嬉しいだなんて。

所の人、そして学校の友だちと先生。あとはわずかに、ときたま会う親戚(しんせき)の人くらいしかありませんでした。

「C」一、本の森に分け入っていくと、そこには子どもの私の想像をはるかにこえた高貴な魂(たましい)をもった人いれば、とてつもない悪党もあり、卑(いや)しさを全身に漂(ただよ)わせる人もいました。「D」同じ人間の中に、その全部が入っていたりもする。別に多重人格のことを言っているのではありません。人は限りなく神に近くもなれば、限りなく悪魔(あくま)に近くもなりうる。そんなことも、物語を読んで知っていました。

あんな人になりたい。こんな人になりたい。そんなモデルが見つかっていく一方で、こんな人にだけは絶対になるまい、とひそかに誓(ちか)わざるをえない人にも一人、また一人と出会っていきました。でも、ことはそれだけでは終わりません。次に課題となつて迫(せま)ってきた問題は、どうしたら、自分が尊敬(そうず)そうです。まさしく憧(あこが)れ、尊敬する人々でした)できる人に一歩でも近付けるかであり、どうしたら逆の人間にならずにいられるかということでした。「E」一、これが本格的な課題となつて私に迫ってきたのは、中学生になつてからのことだったように思います。「F」一、また本を読みました。本や映画や旅、そして日々の③クラシを通してのこの課題に応(こた)えるための作

「G」一、と私は自意識でふくれあがつた学生たちに話しました。絵画でも音楽でもいい。芝居(しばい)でも映画でも一篇(いっぺん)の詩でもいい。自然界の一コマでもいい。それらの持つ強力な力に圧倒(あつとう)されて、ただただぼうつとなり、自分のことなんてふつとんでしまうということはないだろうか。自分が限りなく小さな存在としか感じられなくなること、気が付いたら自分なんて消えてしまっていたと感(かん)じることはないだろうか。そういう体験を重ねていってほしいと。

なぜそんなことを毎年々々若い人たちに言ったかですって？ 実は自分を限りなく小さく感じさせるもの。自分を壊してくれるもの。そうしたものが私を今日まで生かし続けてくれた。それが私の実感だからです。

Kさん、あなたには、もう何もかもいやになり、希望が持てなくなつて、「どうせ」と思い始めるときがありませんか。私にはありません、今だって。そんなとき、あなたはどうかやって、自分を立ち直らせますか。

私は無理をしても気になつていた本を読んだり、美術館に出かけたり、映画館に出かけたりします。そして、先人たちの、あるいは同時代を生きた人々のいい仕事の前に立ちます。するとどうでしょう。(4)恥(は)ずかしくなつて、自分を叱(しか)らずにはいられないのです。「偉(えら)そうに！ 何がどうせだ」と。そういう

ときの自分に向ける私自身のことばは荒(あら)っぽくなります。「どの面(つら)さげて、そんなことが言えるのか」。私は自分で自分を叱り、しゅんとなります。どうせに傾(かたむ)きかけていた自分の*傲慢(ごうまん)さを恥じます。これほどに世界はゆたかなのに、そのゆたかさを知らうともしないで、見切りをつけるなんて！

たとえばあるとき私はフランスの写真家、ロベール・ドアノール(Robert Doisneau)の写真展に出かけ、あの写真、この写真と、楽しいやらせの写真も含(ふく)めて市井(しせい)の人々をとらえた写真を楽しんだあと、展覧会の出口近くで出会った彼の言葉に、思わずスキップを始めたことがあります。

「たくさんものを見、たくさんのことを聴(き)いてきたけれど、うれしくてそれに夢中だったので、何も学ばなかった」。この文章は、そのすぐ後に「ただひとつ学んだのは、老人たちの動きの気品ある緩慢(かんまん)さは、関節が硬(かた)くなったためというより、熱っぽい*叡智(えいち)の重みによるものだというのだ」と続くのですが、私は、このドアノールのことばにもうすっかり元気づけられ、誰彼④カマわずこのことばを伝えたいのを我慢して、その日はルンルン気分で家に帰りました。

岩瀬成子(いわせじょうこ)の『まつりちゃん』(理論社)という児童文学作品に出会ったときもそうでした。ほんの一步前に踏(ふ)

いま)見たように思いました。一瞬の映像でしたが、こうした光景をカメラでキャッチして伝えてくれた人にも「ありがとう」と言いたくなりました。

清水真砂子の文章による

*傲慢 おごりたかぶること。

*叡智 深くすぐれた知恵(ちえ)。

*誹謗 そしりののしること。

問一 ぼう線①から⑦のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 波線(1)のように筆者が案じている理由を五十字以上六十字以内で書きなさい。

問三 〔 A 〕〔 B 〕に入る言葉をそれぞれ漢字二文字で文章中より探して書きなさい。

問四 波線(2)にあるように作者がずっつけてしまう理由として最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア 自分の子が小さくまとまりすぎて、情けないと思うから。

イ 親の偉大(いだい)さに気づくのがあまりにも遅いと感じたから。

ウ 子どもから嬉しくなることを言われ恥ずかしさを隠したいから。

エ 感謝されても、尊敬されるべきではないと考えているから。

み出すだけで、私たちにはこんな奇蹟(きせき)が起こりうる！いや、こんな奇蹟を起こしうる！これは本当だ！真実だ！現実になしうることだ！その気になれば今日にも！私は現在の社会に希望を失いかけていた自分が恥ずかしくなりました。もう四半世紀もまえのこと、⑤キンム先の短大の教授に、民族文化映像研究所の姫田忠義(ひめだただよし)さんにいらしていただいたことがあります。そのとき姫田さんが学生たちに残してくださいましたことづてを、私はいまだに忘れることができます。

「心が萎(な)えたとき、文化こそが私たちを立ち直らせてくれるのです」

姫田さんはこのときそうおっしゃって、教壇(きょうだん)を降りたのでした。

イスラム社会を*誹謗(ひぼう)するような発言をした知事があります。何とも恥ずかしいことに、日本の文化にこそ人々は学ぶべきだ、と彼は言いました。中国や韓国(かんこく)は日本の⑥リョウドをねらっているから、⑦ケンボウを変えて戦争の出来る国にすべきよ、と言う女性たちが私の周りにもいます。

そんなときに思い出すのです。イラク戦争が形ばかりの終結を見たあと、バグダッドの街角に古本屋さんが店を出しているのを私はテレビで見ました。(5)嬉しかった！やっばり、と思いました。イラクの優(すぐ)れた書物の文化の一端(いったん)を垣間(か

問五 〔 C 〕〔 F 〕に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

い。

ア C それで D ところが E しかも F ただし

イ C ただし D それで E ところが F しかも

ウ C しかも D ただし E それで F ところが

エ C ところが D しかも E ただし F それで

問六 波線(3)「子ども時代」筆者は本を読むことでどのような課題に直面したと言っていますか。課題の内容が書かれている部分を探し、はじめとおわりの六字を書きなさい。

問七 〔 G 〕に入る言葉として、最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア その通りだな

イ そうだろうか

ウ 新しい考えだな

エ いいかげんだ

問八 波線(4)のように筆者がなる理由を「世界」という言葉を用いて説明しなさい。

問九 波線(5)のように筆者が感じた理由として、最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア イラクの優れた書物を以前に読んだことがあったから。

イ 一瞬でも貴重な映像を残したカメラマンに感謝したから。
ウ 文化の力によって人々が立ち直ると実感できたから。
エ 戦争にも負けず力強く生きていく人々に感動したから。

